

# 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽咋工業高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の扱い(改善策等)
1 生徒全員の進路実現のため、全教職員が、新学習指導要領の目的に沿ってタブレット等のICT機器を日常の学習ツールとして活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じて主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むこと、学びの質を向上させていきたい。	① 思考力・表現力・コミュニケーション力の向上のため、タブレット等のICT機器を効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」を主とした授業の取組及び公開授業週間を設け、授業改善に取り組む。	1年間に実施した公開授業・研究授業等の参観回数について、教員1人あたりの平均回数が A 3.0回/人以上 B 2.7回/人以上 C 2.4回/人以上 D 2.4回/人 未満	教員対象に12月に調査 公開授業・研究授業の参観回数 A: 44% B: 37% C: 13% D: 6% 平均回数: 2.8回 評価: B	1・2学期に互見授業週間を行い、公開授業・研究授業を実施した。ほぼ全ての授業に管理職が参観し、授業内容を動画として保存、Google Driveまたは教員のクラウド上で各先生方と共有でき、業務中で参観できない教員も後日映像として見る事ができた。 今後は参観した授業をそれぞれの授業改善に生かし、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことで、学びの質を向上させていきたい。
	② 学力向上を図るために、教科の宿題やレポートの出題方法と回数を工夫するとともに、授業と資格取得の補習指導を通して、家庭等での自学自習する習慣を身につけさせる。	宿題・レポート・資格取得などの自学自習について A 十分取り組むことができた B おおむね取り組むことができた C あまり取り組むことができなかった D 全く取り組むことができなかった	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 70% B: 26% C: 3% D: 1% 評価: A・B合わせて 96%	A・B合わせた評価は96%と、判定基準の90%を上回り、前年度同期(96%)同様に高い結果となった。資格取得等に向けて意識の高い生徒が数多くおり、前向きに取り組んでいることが伺える。ただし、同時期に実施した「学習状況アンケート」では、「試験期間以外の家庭学習」「ほとんどしなかった」と回答した生徒が23%にのぼっている。 今後も資格取得も含めた家庭学習が習慣化し、学力向上につながるよう働きかけを継続していきたい。
	③ 毎月、図書便りを発行し全教員の「お薦めの本」を紹介するとともに、「朝読書週間」などの読書運動を全校的にを行い、読書の習慣を身につけさせる。	朝読書週間を含む個人的な読書、授業や課題研究等の学習で、図書館の書籍を A おおいに利用した B ある程度利用した C あまり利用しなかった D 全く利用しなかった	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 30% B: 18% C: 31% D: 21% 評価: A・Bあわせて 48%	A・B合わせた評価は48%と、前年度同期(36%)と比べやや改善した。昨年度に比べ資格取得を目指し受験する生徒の増加や、各先生方も授業の課題等で図書館の書籍を利用するよう促したことも関係しているのかもしれない。 次年度も図書便りや読書週間等の取組を進めるとともに、生徒が読みたい本、おすすめの本を把握し、図書の充実を努める。また、専門図書や資格取得のテキストを充実させ、学習スペースとしての図書館の利用促進にも取り組んでいきたい。
	④ ジュニアマイスター顕彰のゴールド特別表彰およびゴールド・シルバー・ブロンズの取得を目指し、学校全体で多くの資格・検定への挑戦意識を高めるため、積極的な奨励と補習をより充実させ、認定者数を増加させる。	ジュニアマイスター顕彰ゴールドおよびシルバーの認定者数が学校全体で A 50人以上 B 40人以上 C 30人以上 D 30人未満	年間の認定者数を検証 前期認定者数 6人 後期認定者数 5人 評価: D	年間での認定者数は11人で、その内訳は「ゴールド特別」取得者が2名、「ゴールド」取得者が4人、「シルバー」取得者が5人であった。今年度は得点の高い「技能検定」について受検料が県から補助されるとともに、学校全体として資格取得への具体的なビジョンを示し、教員間の連携向上を図ったことにより、補習計画も改善され受検者数も増加した。これにより、来年度や再来年度にかけてジュニアマイスター認定者数の増加が数値結果として現れる見通しである。 次年度は判定基準を下方修正し、A～Dをそれぞれ10ポイント下げて現実的な目標にする一方で、資格・検定に挑戦しようとする機運が生徒の間で一層高まるよう、より組織的に資格取得を促す体制づくりに努めたい。
	⑤ インターンシップや地元企業説明会等により適切な進路選択を促すとともに、段階や時期に応じた適切な進路説明会やLH、懇談会などで進路に向けた情報提供を行なう。	各種の進路指導行事・LHや懇談会での説明や進路情報により、生徒の進路意識が A たいへん高まった B ある程度高まった C あまり変わらなかった D 全く変わらなかった	保護者対象に 12月にアンケート調査 A: 31% B: 53% C: 10% D: 0% 回答不能(よく分からない): 6% 評価: A・Bあわせて 84%	A・B合わせた評価は84%と、判定基準の80%を上回った。また、「回答不能(よく分からない)」と回答した保護者が28%から6%と減少し、ホームページやメール配信等を通じて進路情報の提供の効果が現れた。 今後も時期に応じた適切な進路指導を行うとともに、生徒の進路意識の高まりが保護者に伝わるよう努めたい。
	⑥ 進路希望の達成のために指導の充実を図る。 基礎学力の定着を図ると共に、授業でコミュニケーション力を付けさせる工夫を行う。 外部講師による講演や面接指導、全教員による個別面談・指導を充実させる。	朝学習や日頃の学習、面接指導などにより、基礎学力やコミュニケーション力が A たいへんついた B ある程度ついた C あまりつかなかった D 全くつかなかった	3年生対象に 12月にアンケート調査 A: 74% B: 24% C: 1% D: 1% 評価: A・Bあわせて 98%	A・B合わせた評価は98%と、判定基準の90%を上回り、前年度同期(98%)と同様に高い結果を達成した。2学期からは、生徒たちに一律の課題ではなく、資格取得の学習を含む自主的な課題に取り組ませる方針を採用した。その結果、Aと回答する生徒の割合が60%から74%へと増加した。 今後も、生徒が適切な進路を選択できるよう、引き続き、学校全体での連携とコミュニケーションを深め、個々の生徒の特性や目標に応じた進路指導を実施していくため、全教員が協力して取り組んでいきたい。
学校関係者評価委員会の評価	○公開授業の参観回数に関して、全く参加していない教員がいるのはなぜか。全体でしっかり取り組んでほしい。 ○ホームページ(HP)の更新が多くなり、以前より頻繁に見るようになった。			
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	○実習教諭数名のアンケートの回答が「参加していない」であった。この役割は実習時、教員を補助する仕事のため公開授業を参観する必要はないので、次回から集計方法を検討したい。 ○HPによる情報発信は好評である。引き続き各部署でHPの更新を積極的に行う。また、新聞等で幅広く情報発信を行う。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の扱い(改善策等)
2 心身ともに健康で逞しい(タフな)人づくりを目指し、部活動や生徒会活動の活性化に努めるとともに、規範意識を高め、いじめを見逃さない学校づくりに努める。	① 県高校総体・新人大会で団体・個人とも上位入賞を目指す。上位大会出場を目指す。	県高校総体・新人大会等で北信越以上の大会に進出した運動部の数が A 7以上 B 5以上 C 4以上 D 4未満	県総体・新人大会結果  6つの部が北信越以上の大会に進出した。  評価：B	今年度は各部とも健闘し、卓球部、ラグビーフットボール部、柔道部、剣道部、ソフトテニス部、ヨット部の6つが北信越以上の大会に出場した。(前年度同期5つ) 各部それぞれが、日頃から努力していることが要因であると考える。今後も運動部加入数が増加するよう生徒会課として発信し、学校全体で運動部全体の活力をさらに向上するように取り組んでいきたい。
	② 文化部の重複加入を奨励し、各部の取組に生徒が積極的に活動し、より良い成果を収める。	文化部の活動と成果に A たいへん満足している B おおむね満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	文化部加入生徒対象に 12月にアンケート調査 A：73% B：24% C：2% D：1% 評価：A・B合わせて97%	A・B合わせた評価は97%と、判定基準の80%を上回り、前年度同期(96%)と同様に高い結果となった。 文化部でもコロナ以前の取組みができるようになり、コンテストや外部での発表の機会が、生徒のモチベーションアップにつながったと考える。複数の部活動加入者も増え活動の幅が広がったことも高い満足度を得られた要因と考える。
	③ 生徒会を中心にして行事への参画意識を高め、生徒が自主的に活動する行事にする。	生徒会行事に A たいへん満足している B おおむね満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：71% B：28% C：1% D：0% 評価：A・B合わせて99%	A・B合わせた評価は99%と、判定基準の85%を大きく上回った。(前年度同期96%) コロナ以前の行事に戻り、その中でも羽工祭の外部アーティスト招聘が生徒たちの満足度を引き上げたと考える。他の行事でも生徒自身が参加し、活動することで満足感や自己肯定感を感じる生徒が増えたと考える。 今後も、伝統ある行事を含め、生徒自身がより満足して参加できるような行事運営を目指したい。
	④ 規則やマナーを守り、思いやりの心を育むため、生徒への声かけや観察を行い、生徒との相互理解を深め、規範意識といじめ防止の意識を高める。	本校の教育活動や規範意識向上の取組により、規範意識やいじめ防止の意識が A 十分身についた B 少し身についた C あまり身につけていない D 全く身につけていない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：79% B：20% C：1% D：0% 評価：A・B合わせて99%	A・B合わせた評価は99%と、判定基準の90%を上回り、前年度同期(100%)と同様に高い結果となった。「朝の挨拶運動」や「規範意識週間」等の取組に加えて、「身だしなみ」に関しての学年集会や「校内におけるスマートフォン(携帯電話)の使用禁止」等の指導をこまめに行うことにより、生徒の規範意識やいじめ防止の意識が高まったものと考えられる。 今後も、引き続き取組を継続し、生徒の行動が変容するよう工夫していきたい。
	⑤ 保健だよりや掲示物、集会、SH等を利用して、生徒の心身の健康管理についての意識の高揚をはかる。	自分自身の心と体の健康管理について A 常に意識して生活している B ある程度意識して生活している C あまり意識せずに生活している D 全く意識せずに生活している	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：64% B：31% C：4% D：1% 評価：A・B合わせて95%	A・B合わせた評価は95%と、判定基準の80%を上回り、前年度同期の93%から大きく変化していない。1学期は新型コロナウイルス感染症による学級閉鎖、2学期はインフルエンザによる学級閉鎖の措置をとったこともあり、健康管理について意識する機会が増えたものとする。今後は心の面についても、「保健だより」等で生徒への働きかけを積極的に行いたい。また、スマートフォンによる朝の健康チェックによる回答を定着させ、その時々によって、質問項目を工夫し、生徒の意識の向上につながるよう働きかけていきたい。
3 社会貢献や環境に対する意識を高めるため、工業学習成果の提供やボランティア活動等を積極的にを行い、地域社会との連携を深める。	① 社会に貢献することの大切さや必要性を認識するために、地域ボランティア活動や校内での一日一善運動を推奨する。	地域ボランティア活動や一日一善運動を通して社会貢献の大切さを A 十分理解している B ある程度理解している C あまり理解していない D 全く理解していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：72% B：27% C：1% D：0% 評価：A・B合わせて99%	A・B合わせた評価は99%と、判定基準の90%を上回り、前年度同期(99%)と同様に高い結果となった。6月の海岸ボランティア清掃に加え、1月に行われたボランティア清掃でも、清掃後の分別されたゴミの様子から、生徒が真剣に取り組んだことがうかがえ、社会貢献の大切さを十分理解していることが確認できる。 今後も日々の「一日一善運動」などの取組みから生徒の社会貢献に対する意識を高めたい。
	② 環境保全のこれまでの取組を向上させ、ゴミ分別や環境保全が正しく行われているかを評価し、環境に対する意識の向上を目指す。	環境保全活動(ゴミの分別・節水・節電等)に A 常に意識して取り組んでいる B ある程度取り組んでいる C あまり取り組んでいない D 全く取り組んでいない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：60% B：34% C：5% D：1% 評価：A・B合わせて94%	A・B合わせた評価は94%と、判定基準の80%を上回り、前年度同期(95%)と比較して大きく変化していない。しかし実際には、燃えるゴミにペットボトルや空き缶が混入しているような状況も一部において見られる。今年度は、普通教室から清掃用具の点検・補充を進めている。道具を整備することで掃除しやすい環境づくりにつなげ、自分たちの学校を自分たちできれいにする気持ちを持ってもらいたい。災害を経験し、水や電気の大切さを再認識している時なので生徒の意識をより高めていきたい。
4 教職員相互の業務点検による平準化で業務を分担するとともに、協力体制を構築し、更なる働き方改革を推進する。	① 校務分掌ごとに業務内容を点検して改善に努めるとともに、ICTを活用し情報伝達のスピード化と共有化を高めることで協力体制を構築して組織的な業務の平準化を進める。	自らが担当する業務を改善するとともに他の職員が担当する業務に協力することで、業務の平準化に A 十分努力している B ある程度努力している C あまり努力していない D 全く努力していない	教員対象に 12月にアンケート調査 A：23% B：69% C：6% D：2% 評価：A・B合わせて92%	A・B合わせた評価は92%と、判定基準の70%を上回り、今年度中間評価と比較しても9%の数値が向上した。これは、各先生方が他の分掌との繋がりを意識し、計画の立案等周到に準備した結果だと考えられる。 特に、各先生方がChromebookなどの端末を利用しながら情報を共有し、メール等で効果的な情報発信を行ったことも一因である。今後も引き続き、Chromebook等の端末を駆使した情報共有を通じ、お互いの分掌を越えた連携を意識しつつ、余裕を持って仕事を進めていき、業務の平準化や多忙化の改善に向けた取り組みをより一層推し進めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		○部活動・生徒指導に関して満足しているが、部活動でもっと結果をだしてほしい。期待してる。 ○小さいことでも良いから創意工夫して働き方改革につなげてほしい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		○部活動指導は超過勤務時間を減らすよう考慮しながら、競技力向上や活性化に向けて取り組んでいきたい。 ○ICTをより活用し、業務の効率化及びDX化(情報の蓄積、自動化、共有化)を行い、働き方改革につなげたい。		